統計学で解き明かす成人の日社説の変遷

平成日本若者論史 5

後藤和智
（後藤和智事務所 OffLine）

統計学で解き明かす成人の日社説の変遷

平成日本若者論史５

後藤和智
（後藤和智事務所 OffLine）

まえがき

27 冊目の同人誌となります、後藤和智です。今回のテーマは「成人の日の社説」です。

成人の日の社説というと、最近話題になったのは、2012 年の朝日新聞のそれでしょうか。2012 年 1 月 9 日付け社説において、「成人の日に――尾崎豊を知っているか」という文章を発表して、一部で話題をさらいました。20 年前の尾崎豊の自殺に触れ、《新聞には「高校を中退し、自由を求めて外に飛び出した彼の反骨精神が、僕を常に奮い立たせていた」と投書が載った》として、当時の若年層には社会への反発があった、それに比して現在の若年層はそのようなものがなくなっている…と書いています。

このような文章が載ってしまうのを見ると、2000 年代初頭に「荒れる成人式」が話題になった頃とは隔世の感があると思わざるを得ません。覚えている人は少ないかもしれませんが、2001 年、香川県と高知県で、壇上の知事などに対して新成人が罵声を浴びせかける、あるいはクラッカーをならすなどの事件が起こり、刑事事件にまで発展しております。前年に当たる 2000 年に所謂「17 歳の犯罪」が話題になっていたこともあってか、現代の若年層の危機的状況を煽るための一つのツールとして流通しました。2002 年の新聞各紙の社説においては、この事件を明らかに意識したものが見られた他、一部の新聞はそれ以降もたびたび見られます。

そもそも成人の日の社説というものは、新聞各紙における若年層に対する見方の開示という役割を果たしているようにも思えます。各紙がこぞってこの年に、若年層に対する見方を示してくれるのですから、その時々において若年層がどのように見られていたか、ということを検討する上では絶好の素材と言うことができます。特に 1990 年代中盤頃から始まる劣化言説の時代の中で、成人の日の社説に代表される、メディアの若年層への見方がどのように変動したかということの検討を行うことにより、一つの歴史を作っていきたいと思ったからです。

本書は、1994 ～ 2013 年の 20 年間の成人の日に発表された新聞各紙の社説を 2 つの側面から分析することにより、それを明らかにするという試みです。

第一に、以前『忙しい人のための若者論 ver1.0――市民のための統計学・実例編 Extra ＆平成日本若者論史 1』（後藤和智事務所 OffLine、2011 年 2 月／コミティア 95）で行った、社説を読み込んでいくつかの質的指標で評価し、それを多変量解析にかけるという方法です。ただ、同書のように 100 くらいのダミー変数を考えるのではなく、20 程度の評価基準を作り、それに対して点数を与えるという方法をとります。これにより、変数が少なくなるので、分析が簡便になり、結果もわかりやすくなるという利点が生まれます。

もう一つは、形態素解析データを用いたテキストマイニングによる分析です。形態素解析については、2012 年の冬コミ（コミックマーケット 83）において、「エロマンガ統計」シリーズで知られる同人サークル「でいひま」の牧田翠氏（ちなみに氏はニコニコ超会議 2 で開催されるニコニコ学会のポスター発表のスカウトを受けたようです。どのような発表になるか、非常に楽しみですね）が『一般人な俺と魔王な彼女のライトノベルが形態素的にこんなにエロいだなんて！？（ラノベ統計・2)』（でいひま、2012 年 12 月／コミックマーケット 83）において、ライトノベルの形態素解析を行っていました。統計系同人の同士としてこのような先駆者が現れるのは実に心強いことだと思います。私も牧田氏の問題意識を受け継ぎ（？）、テキストマイニングを通じて、文章の世界の分析に統計学の視点を加え、新たな世界を切り拓いていきたいと思います。

この 2 側面について、それぞれ、検定や多変量解析など、様々な分析手法を用いて、成人の日の社説がどのようなものであり、そしてどのように変化していったかを見ていきたいと思います。詳しい分析手法についてはそれぞれの章に詳述しますが、青少年言説の統計分析というものは表立って行われることが少ないので、その間隙を埋めるという作業を行っていきたいと思います。

なお、表紙の写真は、仙台市の成人式の会場である仙台市体育館（仙台市地下鉄南北線「富沢」駅より徒歩 5 分程度）です。本来であれば成人式の当日に写真を撮りたかったんですけど、肖像権とかの問題がありますし、そもそも 2013 年の仙台市の成人式は 1 月 13 日で、そのとき私は「こみっく☆トレジャー 21」で大阪に行っていたので物理的に無理でした。

目次

まえがき　4

第 1 章 成人の日社説の主な流れ　7

1.1 はじめに　7

1.2 分析対象と分析手法　7

1.3 成人の日の社説の流れ　7

1.3.1 第 1 期（1994 ～ 1997 年）：冷戦終結、バブル崩壊の後での団塊ジュニアへの期待　8

1.3.2 第 2 期（1998 ～ 2001 年）：不況の深化と劣化言説のはじまり　9

1.3.3 第 3 期（2002 ～ 2005 年）：「荒れる成人式」と、劣化言説に侵蝕される社説　9

1.3.4 第 4 期（2006 ～ 2009 年）：不況・就職難を強く意識し政策提言多い 10

1.3.5 第 5 期（2010 ～ 2013 年）：不況・震災後の「希望」を語る反面、「低成長世代論」の蔓延も　10

1.4 まとめ、分析に入る前に　10

1.5 おまけ：阪神、東日本大震災は社説にどう影響したか　11

第 2 章 総合的評価とその分析　12

2.1 はじめに　12

2.2 分析手法　12

2.2.1 指標 1 ～ 2：全体的な評価　12

2.2.2 指標 3 ～ 8：社会観、若年層の生育環境に対する見方　12

2.2.3 指標 9 ～ 11：人物を引き合いに出しているか　13

2.2.4 指標 12 ～ 17：「大人」としての自覚・義務をいかに捉えているか　13

2.2.5 指標 18 ～ 25：劣化言説への親和性　13

2.2.6 採点法 14

2.3 各指標の t 検定・分散分析　14

2.3.1 はじめに　14

2.3.2 若年層をどう見るか？（指標 1,2）　14

2.3.3 不安の中にある社説（指標 3）　16

2.3.4 情報化社会論はどう使われているか（指標 4）　17

2.3.5 変革か、自覚か（指標 5,6,12,13,14）　17

2.3.6「呼びかけ」の多様性（指標 15 ～ 17）18

2.3.7 古い劣化言説、新しい劣化言説（指標 18 ～ 21,23）　18

2.3.8「荒れる成人式」の様相（指標 22,24）19

2.3.9 世代論の広がりと社説の質（指標 8,25）　19

2.3.10 その他（指標 7,9 ～ 11）　20

2.4 各指標に関する回帰分析　20

2.5 各指標に関する多変量解析　21

2.5.1 はじめに　21

2.5.2 因子分析　21

2.5.3 階層的クラスター分析　22

2.6 まとめ　25

第 3 章

テキストマイニングによる社説の分析　27
3.1 はじめに　27
3.2 分析のための下準備　27
3.3 形態素の回帰分析　27
3.3.1 指標 1,2　27
3.3.2 指標 8 31
3.3.3 指標 13　31
3.3.4 指標 14　31
3.3.5 指標 24　31
3.3.6 指標 25　33
3.4 クラスター分析 33
第 4 章 考察・まとめ　37
4.1 全体を通しての概観　37
4.2 成人の日の社説はいかにあるべきか？ 37
第 5 章（おまけ）極私的成人の日社説ベスト 5 &ワースト 5　38
5.1 ベスト 38
5.1.1 ベスト 1：2013 年朝日新聞――成人の日の社説で若者論を批判的に検討　38
5.1.2 ベスト 2：2004 年中国新聞――「成人」をめぐる議論を紹介し、思考を促す　38
5.1.3 ベスト 3：2011 年西日本新聞――日本の「年齢」イメージから考える　39
5.1.4 ベスト 4：2011 年沖縄タイムス――「荒れる成人式」から 10 年、当事者の声を再発掘　39
5.1.5 ベスト 5：1995 年朝日新聞――訓示系社説の手本　39
5.1.Extra ベストおまけ：2005 年西日本新聞――こういうの嫌いじゃないです　39
5.2 ワースト　40
5.2.1 ワースト 1：2002 年産経新聞――日本社説史に残る「悪」社説、社説の名に値せず　40
5.2.2 ワースト 2：2007 年朝日新聞――日本社説史に残る「迷」社説：迷走朝日、ついに携帯電話になる 40
5.2.3 ワースト 3：1998 年西日本新聞――一方的な「成人式取り上げ」の正義に酔う 41
5.2.4 ワースト 4：2008 年北國新聞――見ているこちらが恥ずかしくなる 41
5.2.5 ワースト 5：2012 年朝日新聞――明らかに滑っている　41

第１章
成人の日社説の主な流れ

1.1 はじめに

まえがきでも示したとおり、本書は、1994 ～ 2013 年の成人の日の社説を分析することにより、新聞メディアの若年層に対する見方がどのようなものであり、そしてどのように変動していったかについての検討を行うものである。

1994 ～ 2013 年という時期区分について、このような区分を採用した理由としては、第一に期間が 20 年と区切りがよかったこと、第二に 1994 年頃より現代の若年層に対する劣化言説の進行が始まったことが挙げられる。まず後者について説明を加えておきたい。

1994 年とは、当時ある種の道化として若年層を擁護する立場を取っていた宮台真司が、現代を規範が失われた時代とするポストモダン的な時代認識に基づき、当時の女子高生の行動を「分析」して保守系の論客と盛大な論争を繰り広げていた（ブルセラ論争）時期であった。宮台は、その翌年に発生したオウム真理教による地下鉄サリン事件や 1997 年の所謂「酒鬼薔薇聖斗」事件においても同様の行動をとっていたが、それはポストモダン的な時代認識と、それが若年層において広がっていることを広めたことにより、結果として若年層劣化言説の種をまいたことは否めないだろう（なお、宮台をはじめとする、ポストモダン系のオウム言説の誤りについては、大田俊寛［2011］に詳しい）。宮台自身も 1998 年頃からは、「脱社会的存在」というキーワードを用いて、劣化言説に傾倒するようになった（このあたりの流れについては、後藤和智［2008］に詳しい）。

その後 2000 年においては、所謂「17 歳の殺人」、そしてまえがきでも述べたような 2001 年の「荒れる成人式」により、若年層に対するバッシングはほぼ最高潮に達している。しかし 2000 年代後半～ 2010 年代になると、今度は若年層の「無気力」が問題視されるようになった。それがまえがきで示した 2012 年の朝日新聞の尾崎豊論にもつながっているのだろう。

この通り、1994 年～ 2013 年という期間区分は、メディアにおける若年層への見方を検討する上で、ある程度適切なものと言うことができる。

1.2 分析対象と分析手法

本書においては、第一に質的指標の評点に関する統計的な分析、第二にテキストマイニングを用いて、成人の日の社説がどのように変遷したか統計的に分析し、各紙社説の性質と変遷について見ていく。テキストデータについては、産経新聞を除く全国紙は、2012,2013 年は新聞社サイトのテキスト、それ以外は縮刷版のコピーを OCR で読み取って実際の文章に合うように修正したものを使った。また、産経新聞及び地方紙は @nifty の新聞記事のデータベースで公開されているものを用いた（新聞ごとにデータベースの収録期間が違うことに注意。また検索ワードは、「社説」「主張」がタイトルに含まれるものとし、その中でタイトルから成人の日を扱っていると明らかに分かるものを用いている）。ただし、新聞ごとに成人の日の若年層をテーマにした社説を発表していないことがあるので、その際は使用しない。下記に 1 つでも使用した新聞を示す。使用した年の社説と略称については表 1-1 に示す。

なお、成人の日は 1999 年まで 1 月 15 日で、2000 年より 1 月の第 2 月曜日に変更されているが、前日が日曜日となるため、2000 年の産経新聞のほか、東奥日報や北日本新聞、高知新聞などの一部社説は当日ではなく前日に成人の日や新成人を採り上げることもある。そのため、2000 年以降は検索の際には前日の日曜日も検索対象に加えるようにしている。また 2001 年は、21 世紀の最初の年であること、また成人の日が 1 月 8 日と早かったことから、ほとんどが年始特集的な社説であり、成人の日を採り上げた社説は 3 紙のみであった。

これによって得た、全 244 社説を分析対象として扱い、成人の日の社説の特徴や動きから、我が国の若者論の一側面を照射してみたいと思う。

1.3 成人の日の社説の流れ

本節では、社説の観測期間を 5 つに分け、それぞれの社説に書かれた時代背景や、若年層への視線を見ていくこととする。

本書では、1994 ～ 2013 年の成人の日の社説について、4 年ごとに 5 つの区分に分けることを提案したい。この 4 年ごとの区分は、平成年代の若者論そのものの流れにも符合し、若者論の影響を強く受けると考えられる成人の日の社説の分析の際にも、明確な影響が観測されると考えられ

表1-1 使用した新聞

No.	名称	地域	年 1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003
1	読売新聞	全国	○	○	○	○	○	○			○	○
2	朝日新聞	全国	○	○	○	○	○	○			○	○
3	毎日新聞	全国	○						○			
4	産経新聞	全国	○	○	○	○	○		○		○	○
5	日本経済新聞	全国	○	○	○	○					○	○
6	北海道新聞	北海道	○	○								
7	東奥日報	青森										
8	秋田魁新報	秋田										
9	河北新報	宮城	○	○	○							○
10	新潟日報	新潟										
11	北日本新聞	富山										
12	北國新聞・富山新聞	石川・富山		○		○			○			
13	信濃毎日新聞	長野			○	○	○		○		○	○
14	中日新聞・東京新聞	愛知・東京	○	○		○		○	○	○	○	○
15	京都新聞	京都・滋賀					○	○	○		○	○
16	神戸新聞	兵庫									○	○
17	山陽新聞	岡山									○	○
18	中国新聞	広島							○		○	○
19	愛媛新聞	愛媛										
20	高知新聞	高知					○	○	○		○	○
21	西日本新聞	福岡	○	○	○	○	○			○		○
22	熊本日日新聞	熊本	○	○	○	○	○	○				
23	宮崎日日新聞	宮崎										
24	南日本新聞	鹿児島				○	○					
25	琉球新報	沖縄							○		○	
26	沖縄タイムス	沖縄				○	○			○	○	○
	総数		10	10	8	11	10	6	9	3	13	14

No.	名称	地域	年 2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	合計
1	読売新聞	全国	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	18
2	朝日新聞	全国	○	○	○	○	○	○		○	○	○	17
3	毎日新聞	全国								○	○	○	5
4	産経新聞	全国		○	○	○	○	○	○	○	○	○	17
5	日本経済新聞	全国		○	○	○			○	○		○	12
6	北海道新聞	北海道				○	○	○		○		○	7
7	東奥日報	青森			○	○	○	○		○		○	6
8	秋田魁新報	秋田		○									1
9	河北新報	宮城	○										5
10	新潟日報	新潟					○	○	○				3
11	北日本新聞	富山	○	○	○	○	○	○	○	○	○		9
12	北國新聞・富山新聞	石川・富山					○	○	○		○		7
13	信濃毎日新聞	長野	○	○	○	○	○	○		○	○		14
14	中日新聞・東京新聞	愛知・東京	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	18
15	京都新聞	京都・滋賀		○		○		○		○	○		10
16	神戸新聞	兵庫						○	○	○	○		6
17	山陽新聞	岡山	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12
18	中国新聞	広島	○				○			○	○		7
19	愛媛新聞	愛媛						○			○	○	3
20	高知新聞	高知	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	15
21	西日本新聞	福岡	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	17
22	熊本日日新聞	熊本					○						7
23	宮崎日日新聞	宮崎					○						1
24	南日本新聞	鹿児島		○	○								4
25	琉球新報	沖縄	○	○	○			○	○	○	○		9
26	沖縄タイムス	沖縄	○	○	○		○	○	○	○	○	○	14
	総数		10	10	8	11	10	6	9	3	13	14	244

るからである。

1.3.1 第 1 期（1994 ～ 1997 年）：冷戦終結、バブル崩壊の後での団塊ジュニアへの期待

1990 年代はバブル経済の崩壊で始まった。1994 年には「就職氷河期」が「新語・流行語大賞」の審査員特選造語賞に選ばれるなど（元は就職情報誌『就職ジャーナル』で

作られたものである)、経済的な不安の走りとなる時代となった。そのような時代において、人口的にも直上の新人類世代よりも多い団塊ジュニア世代への期待を表明する社説が多かった。例えば1994年日本経済新聞の「団塊ジュニアの成人諸君」、1997年日本経済新聞の「改革の担い手は君たち団塊ジュニア」がそれに該当する。

この時期の社説に見られるのは、第一に、兵庫県南部地震(阪神・淡路大震災)におけるボランティア活動のような若年層の「可能性」に対する認識である。特に阪神大震災におけるボランティア活動は、1997年読売新聞「21世紀を担う若者への期待」や、1997年中日新聞「神戸で鍛えられた若者たち」などが好意的に採り上げている。

他方で、1970～80年代より続いている若年層の内向傾向、所謂「カプセル人間」論や、あるいは消費社会論による若年層の精神の劣化という認識に基づく若年層批判の社説も一部では見られている。例えば1995年読売新聞「「人に迷惑をかけぬこと」の意味」は、《電車内や、路上など人前で濃厚なキスを続けるカップルをしばしば見かける。雑誌には、素人ヌードが氾濫してもいる。/テレビには「恥かき番組」などというものもできた。それに出演して、自らの肉体的欠陥や性的な「悩み」をあけすけに語りスタジオの若者がはやしたてている》と書いているが、そもそもそれが現代の若年層の「象徴」と言えるのかどうかは疑問がある。また1995年中日新聞「週のはじめに考える　戦後50年　「若者と米国」の危うさ」は若年層の「対米観」の危険性を指摘しているが、これも社説の書き手の世代との違いを徒に「危険」として煽っているようなものにも見える。成人の日における若年層批判の社説は、この頃から見られており、以前からもあった可能性は高い。

1995年に起こったオウム真理教によるテロ事件は、多くの若年層、特に理系の大学・大学院を卒業した若年層が関わっていたとされているが、それを懸念するような社説はあまり見られていない。

また、1997年西日本新聞「新成人よ、甘ったれるな」は、この頃から、最近は成人式が成り立たなくなっている自治体が出てきている、ということを問題視している。と書くが《ところが、十年ほど前から「会場に入らない。入ってもおしゃべりに夢中」というパターンが、すっかり定着した。主催する自治体は、若者たちの興味を引き付け、式を充実させようと四苦八苦している》少なくとも《すっかり定着した》ということ自体、この社説においてすらそう言えるのかどうかは疑わしい。

1.3.2 第2期(1998～2001年):不況の深化と劣化言説のはじまり

この頃の成人の日の社説から、若年層批判が目立つようになっている。例えば京都新聞は、1998年の「プッツンする前に考えてほしい」、1999年の「社会を見つめ行動する若者に」で、相次いで若年層による犯罪を挙げている。ただ、前者については、《たとえば警察庁によると、おやじ狩りと称して集団で大人を襲ったり、覚せい剤やシンナーの乱用から犯罪や非行に走るケースが増加し、一方で「普通の子」が突然、凶悪な犯罪を起こすような「いきなり型」の急増も目立つという》という記述があるが、2005年には科学警察研究所(科警研)によって、そのような「いきなり型」の犯罪の急増というのは見られないという研究結果が出ている(岡邊健、小林寿一[2005])。後者にしてもインターネットでのやりとりを発端に起きた青酸カリ自殺事件を採り上げているものの、そこでは通俗的な情報化社会論に基づいた世代論が展開されているのみである。

京都新聞に限った話ではなく、1999年の中日新聞「「ひ弱な」と言わせぬ体力を」は若年層における体力の低下を批判。2000年産経新聞「厳粛な経験も大人への道」は仙台市での成人式において吉村作治による講演が騒がしかったことを批判。第2期は、若年層批判系の社説が第1期よりも比較的多く現れるようになっている。

このような若年層批判の傾向は、おおよそ1990年代半ば頃を起点として、少年犯罪不安や一部の教師系の論客による公立高校批判などによって若年層への不安が高まったことに端を発しているように見える。そしてそのような若年層への不安や不信の高まりが、この時期の社説の動向に深く影響していると考えられる。

1.3.3 第3期(2002～2005年):「荒れる成人式」と、劣化言説に侵蝕される社説

2001年の成人式においては、香川県高松市や高知県高知市などで騒動が相次ぎ、一部では刑事事件にまで発展した。このことから多くのメディアが「荒れる成人式」として現代の成人式がいかに酷いことになっているかを報道するようになった。

それはその翌年に当たる2002年の社説においても顕著に現れ、同年の読売新聞「自立の精神で時代に向かおう」、産経新聞「若者に媚びる必要はない」、信濃毎日新聞「節目の心構えを確かに」、神戸新聞「「おとなの誓い」をしよう」、沖縄タイムス「全面的見直しが必要だ」、琉球新報「大人の自覚ない者がいる」などといった社説、さらに2003年にも京都新聞「「成人」は生涯の課題だ」、西日本新聞「甘えている場合じゃない」など若年層批判系の社説が相次いでいる。それらのほとんどは、冷静な分析と言うよりも現代の成人式、そして若年層がいかに劣化しているかという視点で書かれることが多く、成熟した議論とは言えないのが現状である。

このような若年層批判系社説の傾向は「荒れる成人式」系以外にも、例えば2004年河北新報「働く意義とは何なのだろう」と2005年読売新聞「「働く」ことの意味を考えたい」、同年の産経新聞「日本の未来を担う気概を」はフリーターの増加を懸念・批判しているなど、労働関係での若年層批判言説も見られるようになっている。また琉球新報は、2005年にも「荒れる成人式」を社説で採り上げている（2005年琉球新報「責任の重さ自覚しよう」）。

1.3.4 第４期（2006～2009年）：不況・就職難を強く意識し政策提言多い

しかし、この時期になると、第2,3期に見られたような若年層批判言説は減少傾向に入る。不景気や若年層における就職難などが認識され、徒な若年層バッシングの機運が若干薄れてきたからだ。特に日本経済新聞などは、若年層の可能性をいかに引き出すかということについて述べることが多くなり、例えば2006年「転換期に挑戦する新成人に期待」においては、《日本経団連は昨年五月にまとめた若手育成に関する提言で「将来性を重視して能力の高いフリーターを採用し、育成することは企業にとっても有益」と述べている。提言にとどめず成果を上げてほしい》と述べている。また2008年沖縄タイムス「機会の平等が希望生む」は、沖縄県が進めている若年層への雇用促進制度を挙げている。

> 県が進めている「みんなでグッジョブ運動」は、失業率を全国並み水準まで引き下げるための県民運動である。求人と求職のミスマッチ解消や、就業意識の改善など、さまざまなメニューが挙がっている。
>
> 失業率をめぐる沖縄固有の問題がどこにあるか、現状分析は県や金融機関を中心に相当深く進められている、といっていい。それをどう雇用改善に結び付けていくかがこれからの課題だ。
>
> 検討に値すると思うのは、普通のビジネス手法で公益を達成する「社会的企業」という仕組みや、環境保全、高齢者介護などを対象にした「共生事業（新しい形の公共事業）」という考え方である。いずれも公共性を重視した雇用創出の手法だ。
>
> （2008年1月14日付沖縄タイムス社説）

不況や就職難を意識してか、成人の日の社説も政策提言の色が強いものも現れているが、他方で雇用関係や、あるいは投票率の低さを問題視した若年層批判も少なくはない。ただ、朝日新聞や産経新聞を除いて、あからさまなバッシングは少なくなっているのもまた事実である。

1.3.5 第５期（2010～2013年）：不況・震災後の「希望」を語る反面、「低成長世代論」の蔓延も

第4期から始まる、成人の日の社説における若年層をバッシングする傾向の低下は、この時期にも引き継がれる。特に2012,2013年は、2011年に東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）という未曾有の災害を経験したこともあって、その中にあっていかに「希望」を持つかということを書く社説も目立った。1995年の阪神大震災や2011年の東日本大震災が成人の日の社説にどのように影響したかについては、本章第5節で述べることとする。

ただし、あからさまなバッシングが退潮した反面、この時期の新成人がバブル崩壊後に生まれてきた世代であるということから、「成長を知らない世代」として扱うという世代論を底にした社説が増えてきている。例えば2012年西日本新聞の「成長を知らない君たちへ」のように、《それでも高望みしなければそこそこ暮らしていける。友人とはメールでつながっていられるし、就活に失敗しても親に依存していれば生きていける。そんな社会環境であるのも事実だろう》と述べているものがある。また2012年朝日新聞の「尾崎豊を知っているか」はそのような認識がさらに顕著になった例として見て然るべきだろう（この社説については第5章参照）。明確なバッシングにつながっている社説は少ないものの、宿命論的な見方の広がりは問題視されて然るべきだろう。

なお、2011年琉球新報「大人の責任、心に刻んで」は、この時期では唯一の「荒れる成人式」批判である。

1.4 まとめ、分析に入る前に

前節では成人の日の社説と、その周辺である若者論の流れを見てきたので、ここからは、分析に入る前に、成人の日の社説の大雑把な特徴を把握していきたい。

まず、観測期間の20年間で、ほぼ変わらない特徴として、第一に「閉塞感の打破」、第二に「選挙に行くことの呼びかけ」がある。まず前者については、前節でも述べたとおり、1994年は「就職氷河期」が流行語になるなど、バブル崩壊後の先行きが不透明な時代、長期停滞の始まりであった。そして20歳を迎える若い世代に対して、重苦しい現状を打破してくれるような働きが期待されていた。また投票率の低さというのも観測期間内に一貫して見られる論調であり、政治への参加、成人としての社会への責任を果たすための最低限の手段としての選挙、という認識は変わらない。

他方で、社会状況や若者論の状況の変化と共に変わってきたものがあるのもまた事実だ。特に若年層が「劣化」し

ているという認識の裏付けとして採り上げられるものは、時期と共に変化している。第2期においては主に携帯電話の普及が問題視され、第3期は多くの社説が「荒れる成人式」論に色めき立ったほか、第2～3期にかけては「フリーター」「ニート」関係の言説が見られるようになっている。そして第5期においては、低成長の中で育った新成人という認識が重低音の如く通底しているのである。

以上から、成人の日の社説が、その時々の若者論の影響を受けるものであるという本書の仮説は、定性的には支持されうるものであると考える。そして今度は、それを定量的に評価することにより、その時代における若者論の表出としての成人の日の社説という性格を、より一層はっきりとさせていこうと思う。

1.5 おまけ：阪神、東日本大震災は社説にどう影響したか

成人の日の社説の持つ一つの側面として挙げられるのは、若年層の「ポジティブ」な行動への期待もあるだろう。特に、1995年1月17日の兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）や、2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）においては、多くの若年層が被災地に飛び込んで、ボランティア活動を行った。それが大人世代の社説の書き手に好意的に映り、社説においても若年層の可能性として書かれることがあった。

例えば1997年中日新聞は、阪神大震災の震災ボランティアで活動した若年層を「神戸育ちの若者」として採り上げているが、ボランティアは、最初は被災地のために、という意気込みで神戸に入ったものの、《「かわいそうな被災者を助けてあげる」。そんな見おろし型の行為や言葉に、生死の境で生き続ける被災者は敏感だった。ボランティアのうぬぼれや虚飾は容赦なくはぎ取られ、自分を見失う者が続出した》としている。しかしそれを乗り越えた若年層もいたこともまた事実であり、《そうした体験を重ねるにつれて彼らはたくましさを増し、ボランティアの深い意味を発見していく》としていた。

2012年の社説では、東日本大震災のボランティアを挙げて若年層の可能性として記述した新聞が多かった。産経新聞「志は「世のため人のため」」、中日新聞「前へ、明日へ、未来へ」、京都新聞「社会動かす力になろう」、中国新聞「居場所と出番を探そう」、高知新聞「次の世代への責務を共に」、沖縄タイムス「転換期こそ若者の出番」などが挙げられる。しかし、中日新聞は《時代が二つに分かたれました。震災前と震災後》などと書いているが、そのような時代論はむしろ震災を過剰に「特別視」することにより、実際の被災地での現状を覆い隠すものでしかないだろう。

第 2 章
総合的評価とその分析

2.1 はじめに

本章では、成人の日の社説がどのように変遷していったかについて、質的指標を用いて分析することにしたい。

質的な指標を用いる意義としては、社説で使われている単語（形態素）の分析では、社説の内容について客観的に評価することはできるものの、全体的な傾向を見るには十分ではないからである。そのため、全体を通しての内容の分析も並行して行うことにより、形態素解析やテキストマイニングによる量的な側面の把握と突き合わせることで、より一層多面的な評価が可能となる。また、社説は基本的に数百～ 2,000 字程度のため、全体像の把握が容易であり、今回のように大量に評価を行う場合も社説を読んだ後速やかに評価を行うことが可能だ。

2.2 分析手法

分析については､25 指標を設定し､それぞれについて「当てはまる」「やや当てはまる」「やや当てはまらない」「当てはまらない」などの 4 段階で評価し、それぞれに点数を与える。そしてここで得た得点に対して分析を行う。

成人の日の社説が、各紙の若年層に対する見方を反映するという本書の立ち位置から、指標には社説が若年層をどう見ているかという観点から設計した。以下にそれぞれの指標を示す。また、それぞれの指標は 4 段階評価とする。

2.2.1 指標 1 ～ 2：全体的な評価

指標 1「若年層を肯定的に見る傾向」

指標 2「若年層を否定的に見る傾向」

こちらの 2 指標は、全体的な評価である。全体として見た若年層のとらえ方について、肯定的な側面と否定的な側面の両方から見ていくことにする。このように 2 つに分けたのは、全体的に「肯定 / 否定」で評価しようとすると、若年層の両方の側面のとらえ方について一方的な評価になりがちだからだ。

指標はいずれも、「3 点：強い」「2 点：やや強い」「1 点：弱い」「0 点：ほとんどない、全くない」とする。

2.2.2 指標 3 ～ 8：社会観、若年層の生育環境に対する見方

指標 3「冷戦終結や不況などによる価値観・秩序の崩壊を重視しているか」

指標 4「情報化社会論を重視しているか」

指標 5「若年層に「変革」「現状打破」への期待を説くような表現が見られるか」

指標 6「「自分（大人）たちも反省しなければならない」のような表現が見られるか」

指標 7「何らかの調査・統計データを引き合いに出しているか」

指標 8「安直な決めつけに基づく単純な世代論になっているか」

成人の日の社説には、現代の若年層がどのような時代や生育環境の下で育ってきたかということを論じることがある。そのため、新成人への「呼びかけ」には、社説の筆者の社会観、世界観が現れると捉えることができる。

本書の観測期間である 1994 ～ 2013 年は、初期は共産圏諸国の崩壊やバブルの崩壊、就職氷河期の到来に始まり、1990 年代後半は大企業の倒産に代表されるような経済危機、2000 年代前半はアメリカ同時多発テロ事件などの国際的な不安の高まりや、国内的にはデフレ不況の長期化、そして 2000 年代終わり頃にはリーマン・ショックなどがあった。そのような「危機的な」状況に際して、成人の日の多くの社説はその中で若年層は危機感を持ち、そしてこのような現状を変革すべく行動することを期待するような論調であることが多い。

また若年層の育ってきた生育環境への見方への視座も不可欠だ。これは社説の中で展開される若者論のベースであり、社説の書き手が若年層をどのように捉えているかというバロメータとなる。ただ、2002 年の産経新聞や、2002・2005 年の琉球新報のように「いかに現代の成人式と若年層が酷いか」ということを強調する社説については、これらを示さないまま、「事例」を採り上げてバッシングする傾向があるので、これらの社説については特徴を捉えることが難しいことに留意されたい。

指標は､指標 7 は「3 点:あり､立論の中核をなしている」「2 点：あり、立論の中核までとはいかなくとも小さくない地位を占めている」「1 点:あるが、添え物程度」「0 点:ない」、それ以外は「3 点：よく当てはまる」「2 点：やや

当てはまる」「1点：あまり当てはまらない」「0点：ほとんど見られない」とする。また指標7については、単純な人口や失業率などの単一の提示のみに終わっている場合は「ない」に分類する。

2.2.3 指標9～11：人物を引き合いに出しているか

指標9「歴史上の人物を引き合いに出しているか」
指標10「現代の人物を引き合いに出しているか」
指標11「文学の引用があるか」

成人の日の社説が若年層に対する「訓示」「蘊蓄」的な傾向を持つことから、歴史上の人物や現在活躍している人物を採り上げることがある（特に産経は歴史上の人物をよく採り上げる）。このような行為は、若年層に対して目標やロールモデルを提示するには手軽で手っ取り早いものとして見られていることもあろう。また朝日新聞や中日新聞などは文学や詩を引き合いに出す場合もある。

指標はいずれも、「3点：あり、立論の中核をなしている」「2点：あり、立論の中核までとはいかなくとも小さくない地位を占めている」「1点：あるが、添え物程度」「0点：ない」とする。

2.2.4 指標12～17：「大人」としての自覚・義務をいかに捉えているか

指標12「「20歳はもう子供ではない」という戒めが見られるか」
指標13「参政権・選挙権・主権者意識の重要性を説いているか」
指標14「参政権以外で「大人の責任」を説いているか」
指標15「他人の感情や痛みを知ることの重要性を説いているか」
指標16「社会や他人と連帯することの重要性を説いているか」
指標17「地域や国家などの身近な共同体の重要性を説いているか」

成人の日の社説が、新成人（若年層）への「訓示」ないし「説教」としての性質を持っている以上、若年層に責任や自覚を促す表現も当然ながら見られる。現代の若年層の「大人」としての自覚のなさを嘆き、これからの社会を担うために意識変革をしてほしいと説くのはよく見られるものだ。指標12で示したような表現は、観測期間の初期からよく見られるものである。

ただしその中においても、やはり内実を理解しておく必要はあるだろう。まず「責任」として主張されやすいのが選挙権である。特に投票行動は自分の意見を政治に反映させるための最も手軽かつ身近な手段であり、また若年層の投票率の低さは以前から指摘されてきたため、採り上げられやすい傾向にある。そのほかにも、心がけとして、他人への配慮や、同世代・他世代・地域とつながり、連帯することなどが挙げられるようになっている。

指標はいずれも、「3点：よく当てはまる」「2点：やや当てはまる」「1点：あまり当てはまらない」「0点：ほとんど見られない」とする。

2.2.5 指標18～25：劣化言説への親和性

指標18「自己主張の弱さ、安定志向への批判が見られるか」
指標19「現代の若年層は成熟を拒んでいるという認識が見られるか」
指標20「コミュニケーション能力の低下への批判が見られるか」
指標21「労働意欲の低下への批判が見られるか」
指標22「通過儀礼が喪失したことを嘆くような表現が見られるか」
指標23「そのほか、若年層にの能力・意欲の「低下」「劣化」を嘆くような表現が見られるか」
指標24「「荒れる成人式」批判を煽り立てていないか」
指標25「社説が愚痴や感情的な表現に傾倒していないか」

若者論といったら外せないのが劣化言説だろう。指標17,18は1990年代前半から見られるものであるが、1990年代後半以降は、現代の若年層を指して、ゲームやインターネットなどが若年層のコミュニケーション能力を低下させているとか、あるいは産経などには「国家」を軽視した戦後教育の悪影響が、などという表現が見られるようになっている。そのような劣化言説幸う若者論における成人の日の社説に見られる劣化認識を測るのがこれらの指標の目的である。

また「荒れる成人式」批判はここに入れた。産経新聞や西日本新聞、琉球新報の一部に見られるような感情的な表現は、指標24と25で評価することにする。ただこの類の社説は、若年層のここが劣化している、というよりも、「今の成人式・新成人はこんなに酷い」という「事例」を並べ立てる手法となっていることが多いので、指標24,25では高い数値を示しても、それ以外の指標では低くなる可能性がある。

指標は、指標25が「3点：ほとんど愚痴・罵倒としか言いようがない」「2点：感情的・短絡的な表現がそこそこ目につく」「1点：感情的・短絡的な表現がちょっと無視できない程度に見られる」「0点：ないか、あっても気にならない」、それ以外が「3点：よく当てはまる」「2点：やや当てはまる」「1点：あまり当てはまらない」「0点：ほとんど見られない」とする。